

目次構成

- 第0章 序論
  - 0-1. 研究背景 0-2. 研究目的 0-3. 研究方法と論文構成 0-4. 既往研究
- 【本論】
- 1章 近代都市緑化運動史
  - 1-1. はじめに
  - 1-2. イギリス近代都市緑化運動史
  - 1-3. アメリカ近代都市緑化運動史
  - 1-4. ドイツ近代都市緑化運動史
  - 1-5. ウィーン都市緑化運動史
  - 1-6. 小結
- 2章 赤いウィーン期の思想と政策
  - 2-1. はじめに
  - 2-2. 赤いウィーンに至る背景
  - 2-3. 赤いウィーン期の思想
  - 2-4. 政策と改革
  - 2-5. 小結
- 3章 赤いウィーン期の住宅政策
  - 3-1. はじめに
  - 3-2. 労働者の生活
  - 3-3. ジェドルンク政策
    - 3-3-1. 政策背景／政治家
    - 3-3-2. 組織構成／経済学者
    - 3-3-3. 建築家・造園家
  - 3-4. ゲマインデパウテン政策
    - 3-4-1. 政策背景
    - 3-4-2. ワーグナーシュレ
  - 3-5. 小結
- 4章 赤いウィーン期のアドルフ・ロースの言説
  - 4-1. はじめに
  - 4-2. 言説
  - 4-3. その他の活動
  - 4-4. 小結
- 5章 アドルフ・ロースのジェドルンク計画
  - 5-1. はじめに
  - 5-2. ウィーンマスタープラン
  - 5-3. ジェドルンク計画
  - 5-4. 労働者のための集合住宅
  - 5-5. ウィーンを離れた後の労働者住宅
  - 5-6. 小結
- 6章 考察
  - 6-1. はじめに
  - 6-2. 赤いウィーンにおけるアドルフ・ロースの位置付け
    - 6-2-1. 赤いウィーン期の住宅運動の位置付け
    - 6-2-2. 赤いウィーン期のロースの位置付け
  - 6-3. ロースの描いたウィーン
- 【結論】
- 結論
- 謝辞
- 参考文献・図表出典

- 序論 -

0-1. 研究背景

赤いウィーン期<sup>1</sup>にアドルフ・ロース<sup>2</sup>は1920年から1924年までウィーン市の住宅地局で働いており、そのうち3年間は主任建築家を務めた。この時期にロースはジェドルンク<sup>3</sup>や労働者住宅に関する計画や労働者の生活像を描いた論考など新体制のウィーンの街に対して多く計画・言説を発表している。赤いウィーン期のアドルフ・ロースの活動については高い評価がなされている<sup>4</sup>にもかかわらず、国内では研究は依然として少ない現状がある<sup>5</sup>。

0-2. 研究目的

本研究では、まず赤いウィーン期のアドルフ・ロースの設計・言説活動に加えて、ロースと当時のウィーン社会との関係性を示すことで赤いウィーン期のアドルフ・ロースの活動を総合的に示すことを目的とする。また、田園都市運動の中で、赤いウィーン期の住宅政策及びロースが構想したウィーン像を位置付ける。

0-3. 研究方法と論文構成

第1章では、赤いウィーン期の住宅政策を位置付けるために近代都市問題に対して代表的な国の都市緑化政策及び田園都市運動を把握する。第2章では、赤いウィーン期の思想及び代表的な政策について把握する。第3章では、赤いウィーン期の住宅政策について、ジェドルンクとゲマインデパウテン<sup>6</sup>について政策背景や関係者を中心に述べる。第4-5章では、赤いウィーン期のアドルフ・ロースの活動を述べる。最後に、第6章で前章までを基にした考察として、アドルフ・ロースの活動を赤いウィーン期の社会の中で位置付けを行い、ロースが描いたウィーン期の都市像を田園都市運動の中で位置付けを行う。

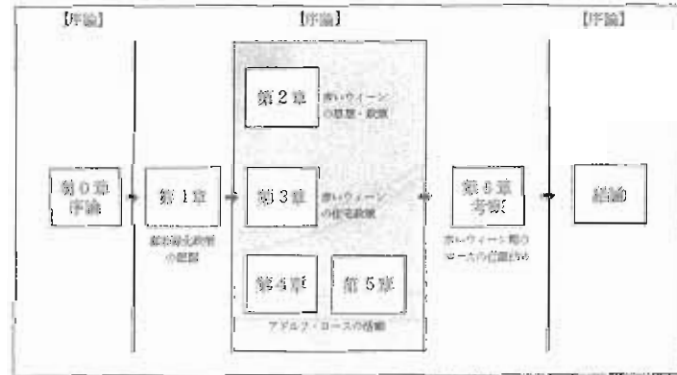


図1 論文の構成 (筆者作成)

0-4. 既往研究

国内の既往研究では、赤いウィーン期のロースの活動の研究<sup>6</sup>は主にロースの建築計画及び言説を中心に断片的に述べられてきた。石井はロースの労働者住宅について言説・設計活動を包括的に述べた。岸本は赤いウィーン期のロースの活動がウィーンを離れた後の設計活動に重要な役割を担ったことを指摘した。本研究は、ロースの活動を具体的な社会背景と結びつけるものとして位置付ける。

- 本論 -

第1章 近代都市緑化運動史

近代都市緑化運動の流れは大きく3つに分類される<sup>7</sup>。これにオーストリアに影響力のあったドイツの近代都市緑化政策<sup>8</sup>を加えて整理を行った。

- ①欧州の城郭都市などの既存都市の改良運動
- ②パークシステムを用いたアメリカの都市計画
- ③ハワードに代表される田園都市建設運動
- ④ドイツの社会主義的田園都市運動

欧州の城郭都市では、産業化と鉄道の発達によって無秩序に拡大する都市に対して緑地帯を設けることによって都市の制御を行った。また、緑地帯には田園郊外 (garden suburb) を設けた。

新興都市の多いアメリカの都市緑化運動は都市計画と併行して行われた。特にオルムステッド<sup>9</sup>が中心となって都市と郊外を公園や街路で連結させるパークシステムが19世紀後半から発達した。オルムステッドの計画した郊外住宅地は、都市性と田園性を併せ持った「都会的村人」を形成するコミュニティを目指した。ハワード<sup>10</sup>の田園都市論は、都市と田園の結合を説き、土地の共有や自立した衛星都市の建設など各国に多大な影響を及ぼした。ドイツでは、イギリスの影響を受けたカンフメイヤー<sup>11</sup>が中心となって社会主義的側面を持つて展開した。小邦国家の集合体であったドイツでは、ロンドンのような過密都市の解決ではなく、中小都市の環境を改良し、相互に連結する地域計画として田園都市運動は発展した。また、クラインガルテンと呼ばれる市民菜園が発達し都市改良政策の中に位置付けられた。

第2章 赤いウィーン期の思想と政策

政治背景

第一次大戦後の市議会選挙にて社会民主党が、それ依然のキリスト教社会党に変わって第1党になり、労働者を中心とした政治政策が展開された。また、オーストリア連邦政府は一時期は社会民主党が与党となるが、1920年にキリスト教社会党が与党となり、連邦政府と首都ウィーンは政治的にねじれ関係になった。1921年にウィーン市が州昇格を果たし、独自の課税権限を獲得したことによって、ウィーン市は独自の諸政策を展開可能となった。

赤いウィーン期の思想

ウィーンはキリスト社会党を支持する貴族・資本家層が強く、また農村部でも同様であったため、社会民主党はロシア・ボリシェビキの暴力的な革命とは距離をおき、「文化的な革命」を目指した。文化的な革命の目標は労働者が健康・健全に生活し、ウィーンが培ってきた文化・芸術を享受できることであった。また、マックス・アドラー<sup>12</sup>は「文化的革命」を実現した労働者を「新しい人間 (neue Menschen)」と呼び、赤いウィーン期政策の標語となった<sup>13</sup>。

赤いウィーン期の政策

赤いウィーン期の主な政策は、①福祉・保健政策②教育改革③住宅政策であり、労働者の生活水準の向上のほかに、いずれも「新しい人間」を教育・形成するために行われた。福祉・保健政策では青少年に対する政策が主で、幼稚園の整備、夏季休暇の田舎の滞在施設整備が行われた。教育改革では、共同体を意識した共産主義のほかに権威的にアドラー心理学<sup>14</sup>が用いられた。

第3章 赤いウィーン期の住宅政策

戦前より住宅不足であったウィーンでは、戦後の混乱の中で更に住宅不足、住環境が悪化した。当時のウィーンには、住居の一部を間借りしたり、ベッドのみを借りるベッドゲアーと呼ばれる労働者が多く存在した。このため他者が頻りに家を出入りことで「家族の未形成」に繋がった<sup>15</sup>。

住宅政策の移行

住宅政策は当初は郊外のジェドルンク建設が主であったが、後に市街地近郊のゲマインデパウテン建設へと意向した。これは、ジェドルンク建設の住宅供給量が少なかったことに加えて、政治的な要因によるものであった<sup>16</sup>。

ジェドルンク政策

ジェドルンク建設は主に1920年から1923年まで行われた。この政策で中心的な役割を担ったのがグスタフ・ショイ<sup>17</sup>とオットー・ノイラート<sup>18</sup>であった。ショイはイギリスの田園都市運動に影響を受け、ウィーン市の住宅政策に関与すると、市政はジェドルンク建設地の都市交通及び都市インフラを整備し、住宅建設は住民によって行われるべきであると説いた。住居形式は庭付きの低層連棟住宅が良いとした。また、ジェドルンク建設のコンペを企画したが、政治的な変動によって頓挫した。ノイラートは、ジェドルンク建設を実現するためのÖVSKやGESIVAなどを組織し、建設ギルド形成をカンフメイヤーと共に進めた。また、アドルフ・ロース、ペーター・ペーレンス<sup>19</sup>、ヨーゼフ・フランク<sup>20</sup>、リホツキー<sup>21</sup>、ミッゲ<sup>22</sup>などの建築家・造園家がジェドルンク建設の配置計画、住宅デザイン、家具設計、などの計画の他、移住者への指導を行った。

ゲマインデパウテン政策

ゲマインデパウテン建設は、1924年以降から赤いウィーン後期まで続けられ6万戸以上の住宅を供給した<sup>23</sup>。住居は小規模で、居間、寝室、台所、小部屋によって構成され35m<sup>2</sup>~60m<sup>2</sup>であった。また、水道、ガス、電気その他、水洗トイレが完備された。ゲマインデパウテンは、一区画を占める巨大集合住宅もあり、そこには中庭、図書室、保育所、相談所など都市機能が整備された。ゲマインデパウテン建設には、多くのワーグナーシュレ<sup>24</sup>が参加した。彼らは、オットー・ワーグナーの大都市のスタディー (1911) やカミロ・ジッテ<sup>25</sup>の広場の造形論をもとに設計し、ゲマインデパウテンは赤いウィーン期の政策を代表するものとなった。

第4章 赤いウィーン期のアドルフ・ロースの言説

アドルフ・ロースは、1918年からパリへ移住する1925年までの間<sup>26</sup>、ジェドルンク及び田園都市生活論全14論考中9論考を執筆している。また、その多くは政治的に中立の立場の新聞に掲載された<sup>27</sup>。また、移住者のための講演活動や2度の労働者デモに参加した。1921年4月3日のデモでは、同日の新聞Neue Freie Presseに「都市住民が移住する日」という論考を執筆している。

ジェドルンク及び田園都市生活論

ロースのジェドルンク及び田園都市生活論を要約すると以下となる。都市と田舎を結び、アメリカ人のような半都市半農民を目指すこと。住居は2階建てとし昼と夜の活動場所を分けること。料理する竈を居間に設けること。

クラインガルテンを住居に隣接させて設置すること。

労働には、破壊行為と建設行為があり、破壊行為が人間的かつ本能的であるのに対して、建設行為は退屈で非人間的である。現在の労働者は分業によって建設行為ばかりを強いられている。クラインガルテンで農作業をすることで、破壊行為を行い精神の養うことができる。また、クラインガルテンでの自給自足は戦後ウィーンの食糧難にも寄与できる。

### 第5章 アドルフ・ロースのジードルンク計画

赤きウィーン期のロースの設計活動は以下4つに分けられる。

- ①ウィーンジードルンクマスタープラン
- ②ジードルンク設計
- ③集合住宅設計
- ④ウィーンを離れた後の設計

#### ①ウィーンジードルンクマスタープラン

ロースが住宅地局の主任建築家として最初にウィーン市のジードルンク配置全体計画を作成した。市の郊外所有地をジードルンク建設地及びクラインガルテンの敷地とした。住居は二階建てとし、高層密集地域からは隔離して配置した。市議会は1921年にこの計画を認可した。またロースはベーレンスと共同で、高層建築のある市街地から緑地帯、菜園付き住居へと郊外へ向かうにつれ低層化し、緑地帯で繋ぐことを構想していた<sup>28</sup>。

#### ②ジードルンク設計

ロースの設計したジードルンクは、(1) ラインツジードルンク (1921) (2) ホイベルクジードルンク (1921) (3) ラーエベルクジードルンク (1921) (4) ヒルシュテッテンジードルンク (1921) の4つで、この他に1921年に④で用いられた「一枚壁の家」の構法の特許を取得している。

#### ③集合住宅設計

ロースは、ゲマインデバウテン型の集合住宅の計画を2つ行っている (1) テラスハウス、実現せず (1923) (2) オットー・ハース・ホフ (1924)。(1)は高額であったことから市が認可しなかった。(2)は(1)と同様のテラスハウス形式で計画されたが、自治体の賛同を得られずゲマインデバウテン形式となった<sup>29</sup>。

#### ④ウィーンを離れた後の設計

1925年にロースがウィーンを離れた後に設計した労働者住宅は、(1) パビのジードルンク (1931) (2) ウィーン工作連盟のジードルンク展の住宅の2つである。(1)はチェコに建設された労働者住宅で、ホイベルクと同様に菜園付き陸屋根で建設された。(2)は基本設計はロースが行ったが、実際に設計したのはクルカ<sup>30</sup>であった。



図2 パビのジードルンク  
Benedetto Gravagnuolo 『Adolf Loos: Theory and Works』(Idea Books, 1982) より

### 第6章 考察

#### 赤いウィーン期のアドルフ・ロースの立ち位置

孤高の存在として社会と切り離されて語られることの多いロースだが、赤いウィーン期においては、ショイやノイラートといったオーストリア田園都市運動と密接に関係していた。また、この時期のロースは、他の建築家や造園家と密接に協同を行っていた。

#### ロースの描いたウィーン

ロースは青年期をアメリカで過ごし、アメリカ文化への憧憬があった。アメリカで19世紀後半より発達した都市と田園を緑地帯や街路で結ぶパークシステムに影響を受けたことが推察される。そのなかで、ウィーンで盛んであったクラインガルテンを取り入れ実用的な労働者の生活像を構想した。

#### 結論

赤いウィーン期の社会背景を整理することによって、この時期のアドルフ・ロースの社会との関係性を明らかにすることができた。ロースは政治的な変化に対して思想は変えず、建築タイプを変形したが社会には受け入れられなかった。また、ロースが描いたウィーン像はアメリカのパークシステムに強く影響を受けたものであると推察された。

#### 注釈

1. 1919年から1934年までの社会民主党市政化のウィーンの通称
2. Adolf Loos, 1870-1933
3. ジードルンクは、戦間期ウィーンにおいては、①戦後の経済混乱のなか、食料の自給自足のために無秩序に開墾されていった郊外の庭付き独立小住宅。②市営の大規模集合住宅団地の対極に位置するものとしての庭付き戸建て/2戸建てあるいは低層連棟建て住宅。北山優子「両大戦間期のウィーンにおける住宅政策に関する研究 - 市営住宅建設をめぐる論争に注目して」『日本建築学会計画系論文集』第459号(日本建築学会, 1994)を参考にしている。
4. ベネヴォロは『近代建築の歴史』の中で、この時期のロースの設計活動は当時の欧州の中でも最も進歩的であり、またこの時期はロースのキャリアの頂点であったと述べている。
5. 国内の主な既往研究 以下5本である。①伊藤哲夫『アドルフ・ロース』(鹿島出版会, 1980)。②伊藤哲夫「ウィーンにおける近代集合住宅について」『国土論』1997, pp. 39-58。③川向正人『アドルフ・ロース 世紀末建築言語ゲーム』(住まい 図書出版局)。④石井宏樹『アドルフ・ロース 労働者住宅 - 戦間期ウィーン労働者住宅を通して -』(中谷研究室, 2013)。⑤岸本啓司「論文>アドルフ・ロースによる戦間期集合住宅建設活動 - 近代都市生活と建築」『ディアファネース - 芸術と思想 - Diaphanes: Art and Philosophy』2: 149-172 (京都大学大学院人間・環境学研究科 岡田温司研究室, 2015)
6. 赤いウィーン期に建設された街区規模の大きさをもち市営住宅。7. 石川幹子『都市と緑地 新しい都市環境 創造に向けて』(岩波書店, 2001)を参照。
8. ドイツの田園都市運動については相田修『都市と農村の融合 - 西ドイツの地域計画』(大明堂, 1997)を参考とした。
9. Frederick Law Olmsted, 1822-1903 10. Ebenezer Howard, 1850-1928 11. Hans Kampffmeyer, 1876-1932 12. Max Adler, 1873-1937 13. 田口晃『ウィーン: 都市の近代』(岩波書店, 2006)参照。
14. 前掲書によれば、アドラー心理学は劣等感の克服手段としてエゴイズムを打ち破り、共同体意識を培うことを人間の成熟として目標にしていたため、教育改革の理念に適合していた。
15. 小沢弘明・佐伯哲朗・相馬保夫・土屋好古『労働者文化と労働運動 - ヨーロッパの歴史的経緯』(法政大学大原社会問題研究所叢書) (木暮社, 1995) では、家族の未形成のほかに、性風俗の乱れやブライバシーの喪失などの問題が挙げられている。
16. 政治的な要因としては、社会民主党ではジードルンク建設によって労働者が土地や住居を保有することによるブルジョア化を非難する考えがあった他、ジードルンク建設に反対する政治勢力が大きな力を握っていたこと、1923年の選挙対策の目玉として「5ヶ年計画」と呼ばれる市営住宅建設を決定したこと、田園都市運動に理解を示した市長ノイマンが正統マルクス主義者のゲイツに変わったことなどが挙げられる。
17. Gustav Scheu, 1875-1935 18. Otto Neurath, 1882-1945 19. Peter Behrens, 1868-1940 20. Josef Frank, 1885-1967 21. Margarete Schütte-Lihotzky, 1897-2000 22. Leberecht Migge, 1881-1935 23. 田口晃『ウィーン: 都市の近代』(岩波書店, 2006)参照。
24. オットー・ワグナー, Otto Wagner, 1881-1918の弟子の通称。
25. Camillo Sitte, 1843-1903 26. なおこの期間ではロースは33論文執筆している。
27. 主な掲載媒体は『Neue Freie Presse』『Neues 8-Uhr-Blatt』『Neues Wiener Tagblatt』
28. 小林純『社会化と労働者運動 - 1920年代ウィーンのノイラート』立教経済学研究所, 1994, vol. 52, 第3号に、ノイラートの証言として掲載。
29. 岸本啓司「論文>アドルフ・ロースによる戦間期集合住宅建設活動 - 近代都市生活と建築」『ディアファネース - 芸術と思想 - Diaphanes: Art and Philosophy』2: 149-172 (京都大学大学院人間・環境学研究科 岡田温司研究室, 2015)
30. Henry Kulka, 1900-1971

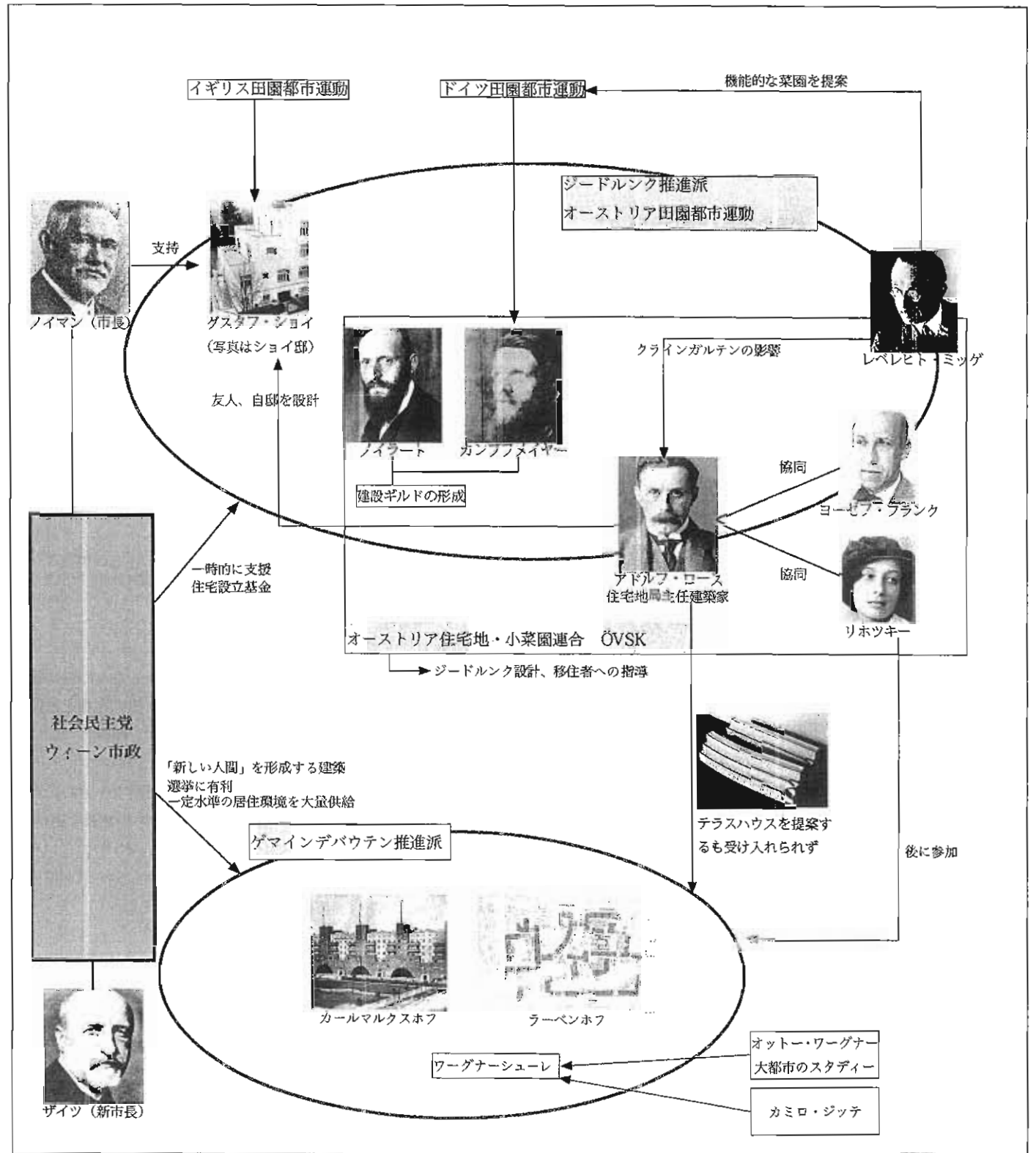


図3 赤いウィーン住宅政策 相関図 (筆者作成)